

洞口千恵歌集

『芭蕉の辻』

(六花書林)

東日本大震災を挟んだ人生の歳月に、さまざまな思いを巡らせた五五四首が収められている第二歌集。震災前、震災後、そして父の死後の三部を中心に構成されており、震災と父の死は作者にとって人生の大きな分岐点となった。

春の砂にあさはりは深く眠りぬむ塩乾珠しほひるたまのひかりを帯びて

震災前、作者はこの一首のように、春を穏やかに迎える心境をゆつたりとしたリズムで表現していた。ところが東北に春の足音も聞こえ始めた二〇一一年三月十一日、作者の住む宮城などを未曾有の激震が襲う。歌集には「眠る」という言葉を用いた作品は多いが、震災後の「眠る」には揺れ動く繊細な心理が投影されている。

震災に奪はれたりし春眠のこぼれこぼれを眠る水無月
震災の影を感じつつ過ごすこと七年、作者に再び、父の死という大きな転機が訪れる。父は若い頃、仙台中心部の「芭蕉の辻」で自転車で転び、障害を負っていた。

健常といふを父より奪ひしは芭蕉の辻の間に棲むもの
「二十一歳」と題する性愛歌を、あえて巻末に置いたことを「恥を思んで歌にし、葬ることにした」と「あとがき」で述べている。詠んで、この「葬る」とは何か。混乱、再生の中で歌を作り続けてきた作者の表現は今後どのように変わってゆくのだろうか。

(薄葉 茂)

高良真実編

『みんなの近代短歌』

(草思社)

高良編『はじめての近現代短歌史』(草思社)のスピンのオフのような一冊。

15人の歌人が、〈没年順〉に並べられているのがひとつの特徴。例えば、生年では2番目の窪田空穂(1877-1967)は没年では14番目になる。高良は「それぞれの歌人の人生とともに近代史を眺めたいと思った」と言う。また、「彼らは共通して、一九〇〇年代前半におけるロマン主義の流行と、一九〇〇年代後半における自然主義への移行を経験している。」「自然主義によって動揺した短歌史を、それぞれの歌人の視点から眺めることが、本書の中心のテーマである。」と言う。

多くが思いつく、啄木、赤彦、牧水、白秋、夕暮、晶子、茂吉、逍空に並んで、三ヶ島霞子、岡本かの子、今井邦子、片山広子選ばれているのも特徴。短歌史のジェンダー意識を変えようとする高良の意気込みが伝わる。

例えば、今井邦子には、孤独な育児の状況を詠んだものが多く、現代人と同じような苦しみを抱えていたと気づかされる、と言う。(小さきえふるん乳くさきえふるん呪はれて子を生みし吾母となりし吾)『片々』(1915)などを読めば、百年以上前の状況と現代がかなり直接に繋がっていることを知る。近代短歌のそういう面の楽しみも教えてくれる一冊だ。

(大松達知)